

二〇二〇年五月四日

主査	慶應義塾大学大学院法学研究科委員 法学部教授・博士(法学)	高橋 伸夫
副査	慶應義塾大学大学院法学研究科委員 法学部教授・博士(法学)	小嶋華津子
副査	防衛大学校 長 慶應義塾大学名誉教授・博士(法学)	国分 良成

相川裕亮君学位請求論文審査報告

一 論文の構成

相川裕亮君が提出した博士学位請求論文『ビリー・グラハムと「神の下の国」アメリカ』の構成は以下の通りである。

序章 ビリー・グラハムとアメリカ

はじめに

第一節 グラハムに関する研究史

第二節 論文の見取り図

第一章 ビリー・グラハムという人物…ファンダメンタリストと「福音派」

はじめに

第一節 前史

(1) キリスト教史

(2) 政教の歴史

第二節 グラハムの登場

(1) 「福音伝道者」としての召命

(2) 「スピリチュアル・カウンセラー」へ

おわりに

第二章 「罪」の神学と「福音伝道者」としての召命

観…理論的背景

はじめに

第一節 「罪の神学」

(1) ニーバーのグラハム批判

(2) グラハムの「罪」理解の深化

第二節 「福音伝道者」

(1) 「福音伝道者」とは誰か…一般的な概念として

(2) 「福音伝道者」とは誰か…グラハム研究からの

視座

おわりに

第三章 冷たい戦争と魂の危機…「反共主義」とカール・マッキンタイア

ル・マッキンタイア

はじめに

第一節 背景

(1) アメリカ社会における「自由」をめぐる言説

(2) カール・マッキンタイアとは誰か

第二節 自由と反共主義

(1) マッキンタイアにおける「自由」

(2) グラハムによる「自由」の相対化

(3) グラハム神学における深化と反共主義

おわりに

第四章 大統領の聖所と神殿…「サイレント・マジョリティ」とリチャード・ニクソン、ノーマン・

ヴァインセント・ピール

はじめに

第一節

ニクソンとお気に入りの牧師たち

(1) ニクソンとグラハムの密接な関係

(2) グラハムとニクソンの信仰の相違

第二節 グラハムとピールの信仰の在り方、そしてニクソンがキリスト教に求めたもの

クソンがキリスト教に求めたもの

(1) グラハムとピールの評価

(2) 「罪」と「癒し」

(3) ニクソンが用いたかった信仰の在り方

第三節 なぜグラハムは信仰の在り方の次元では異なる

ニクソンと協力できたのか…「福音伝道者」としてのグラハム

おわりに

第五章 「神の下の国家」の再建案…「市民宗教」とマー

第五章 「神の下の国家」の再建案…「市民宗教」とマー

ク・ハットフィールド

はじめに

第一節 問いの前提

(1) 時代背景

(2) ハットフィールドのヴェトナム政策批判

第二節 ハットフィールドの「市民宗教」批判

(1) ハットフィールドのグラハム批判

(2) 「福音派」と呼ばれる人々の信仰の違い

第三節 グラハムはハットフィールドをどう理解していたか

(1) 政治家としてのハットフィールド

(2) 「福音伝道者」の限定された役割

(3) グラハムはハットフィールドをどう理解していたか

おわりに

結論

はじめに

第一節 総論

(1) 理論的枠組み

(2) 各論

第二節 含意と今後の課題

(1) インブリケーションと課題

(2) 「酔いがさめた」グラハム

参考文献一覧

二 内容の紹介

本論文は、二〇一九年三月に九九歳で亡くなった米国人キリスト教福音伝道者 (evangelist) ビリー・グラハム (Billy Graham) の神学思想と政治的言動の連関を考察することで、現代アメリカにおける政教関係の新たな読み解き方を提示しようとするものである。

序章では、その葬儀に際してドナルド・トランプを含む歴代合衆国大統領が寄せた弔辞を紹介することで、日本では知名度が低いといわざるを得ない、南部 (ノース・カロライナ) 出身の「アメリカの牧師 (America's Pastor)」の重要性がまず語られる。次に取り上げられるのが研究の現状だが、相川君は、アカデミックな研究書が近年立て続けに公刊されていることを歓迎しつつ、グラハムにまつわる伝記的事実と神学思想との関係をより一層意識した政治思想的考察が求められている、との指摘を行う。その上で、論文全体の構成と各章で用いられることになるキーワードが、相川君自身の問題意識に言及しつつ、概説的に示され

る。

第一章は、グラハムという人物の紹介を行う。ヤンキー・スタジアムなどで大規模な伝道集会を開いたり、世界の要人たちと交友関係を結んだりしたことで、称賛と反感を共に招いてきたのがグラハムであった。しかし相川君によれば、ショーアップされた伝道スタイルにしても、古めかしい信仰箇条の重視に行き着く彼のメッセージにしても、アメリカ宗教界における「色物」のそれなどではない。このことを論証すべく、本章では、二〇世紀初めの神学上の「ファンダメンタリスト・モダニスト論争」や政教関係が問われた訴訟に言及しつつ、グラハムの歴史的な位置付けが試みられる。

その結果として示されたのは、グラハムという人物のアメリカ・キリスト教史における正統性だといえよう。正統性が（そして、主として個人的な清廉潔白さに由来するポピュラリティが）あったからこそ、この宗教界のスターは、アイゼンハワー以降の歴代大統領と親交を深めていったのである。その具体的な様相が本章の後半では記述され、宗教家と政治家が結び付くアメリカの政教関係の特殊なあり方が示唆されることになる。

第二章では、キリスト教神学思想の主要なテーマである

「罪」、および本論文で最も重要なキーワードとなる「福音伝道者」が早くから、グラハムの思想と行動にとって大切な意味を有していたことが論じられる。ここで相川君は、ある人物を読み解くための概念装置が妥当であることを、それがどれだけ長い年月を通じ本人によって重んじられたのかということを規準にして、示そうとするのである。

しかも、叙述が平板になるのを避けるべく、相川君は、アメリカ神学界の大立者であるラインホルド・ニーバーのグラハム批判を、議論の補助線として用いる。ニーバーの批判の主眼は、「罪」からの「回心」という個々人の内面における宗教的变化をグラハムが重視しすぎていることに置かれていた。これはニーバーによれば、若い福音伝道者が「敬虔主義的な道德主義のフレームワークで思考している」ことの帰結に他ならない。たとえば、核兵器にまつわる問題も「人びとをキリストに回心させることで解決する」といった発言に、グラハムの思考法の問題が集中的に表現されていると、老神学者は見る。共同体レベルで問われる正義の複雑さを強調してやまないニーバーからすれば、「救われた者」を特権化していると断じざるを得ないグラハムの政治観や社会観は、端的に未熟なそれだったのである。

しかし、ニーバーの視点からグラハムの言動を捉える研究が一定の伝統を有しているのに対して、相川君は疑義を呈する。それらは、一九五〇年代におけるグラハムの発言をバランスを欠く仕方でも重視し過ぎているのではないかと。そもそも相川君が見るこの福音伝道者は「経験を積む中で自らの思想を研磨していく」タイプの人であった。そして、その「研磨」の実態を知るために、相川君はここでもうひとつの概念装置を提唱する。「福音伝道者」である。

そもそも福音伝道者という職務は、古くは新約聖書の福音書記事にも確認することができる。しかし、相川君の問題意識は、グラハムと彼をアイコンとするアメリカ福音派とを考察するに際して、この職務に対する社会科学的な吟味が足りなかったことに向かう。名目上のキリスト教徒が多い(とグラハムの目に映った)アメリカの大衆に対して、救済についての喜ばしい知らせ(福音)を告知し、悔い改めとイエスの意志への従順とを促す説教を行う。福音伝道者という職務をこのように規定して、それに強い自負を抱いていたのがグラハムであった。だから、このことを看過する研究には、批判が向けられて然るべきなのである。

では、「福音伝道者としてのグラハム」に注目することで、何を語るができるようになるのか。この問いに答

えるべく相川君は、キリスト教神学思想の一要素である終末論に説教で触れるに際して、グラハムが時期によって強調点を変化させたことに着目する。すなわち、神の裁きの切迫性を人びとに訴えていたのが初期グラハムだったとすれば、後期の彼は、イエスの再臨が約束する救済を強調している。相川君によると、こうした神学思想上の変化は、眼前の人びとに効果的に説教しなくてはならない福音伝道者という職務観から、より正しく説明可能になるのである。また、当該職務を重視することで、後の章で詳述されるように、ヴェトナム戦争やカウンター・カルチャーを経験する中で国家と社会に対する疑いを強めていたアメリカの大衆が、当時は希望の終末論を説いていたグラハムに帰依しようとした事実が、そして何より、それに目を付けたリチャード・ニクソンら体制側の政治家とこの福音伝道者との接近が理解できるようになる。

また、本章で相川君は、福音伝道者という職務が帯びるプロフェッショナルリズムを、グラハムが相対化していたことも重視する。伝道は、専門職としての福音伝道者ならざるキリスト教徒にも期待されているのであって、さまざまな職業に就いている人がそれぞれの職務を遂行する中で、その一端を担いうる。これがグラハムの確信であったが、

この確信のゆえに、これも後に一章設けて論じられるように、「職業としての政治」を通じて福音伝道を遂行する存在にグラハムの期待が寄せられることになる。「アメリカの牧師」と政治との結びつきには、必然性があったのである。

以上のように、第二章では若きグラハムに対する老ニーパーの苦言というエピソードから筆を起し、最終的には、本論文全体を通じて活用される概念装置が示されることになる。

第三章では、一九五〇年代から六〇年代にかけて激しくなされたカール・マッキンタイア牧師によるグラハム批判という素材を用いて、議論が展開される。マッキンタイアは、ニーパーとは異なり、伝統的なプロテスタント信仰を奉じる点ではグラハムと軌を一にする。だが、その批判の激烈さは温厚なグラハムをも最後には閉口させてしまうほどであった。マッキンタイアの批判はグラハムが教派の垣根を越えた伝道を展開していることに主として向けられていたが、相川君は二人のやり取りの中から、「罪」をめぐるグラハムの洞察の深まりを浮かび上がらせる。のみならず、ここでの罪論は、反共主義の担い手と一括りにされがちな冷戦期プロテスタントの神学思想とそれに由来する政

治的志向性が実は一枚岩ではなかったことを、読む者に悟らせることになる。

まず相川君は、アメリカにおける自由観の歴史を概観しつつ、本論文が扱う冷戦期のそれを整理する。この作業から、トルーマン・ドクトリンにも反映された、エリック・フォナーというところの「世界を自由世界と奴隷化された世界の二つに分ける戦時の区分法に依拠し、暗黒の勢力に対抗して自由を守るアメリカの使命という全く古めかしいメシア的世界観」に固執するマッキンタイアの基本姿勢が浮かび上がる。彼の過激な反共主義にしても、それは「世界を自由へと導くのはアメリカの務めである」との信念に由来するものであった。

しかし、マッキンタイアの名言説が冷戦下で耳目を集めていた時期にあっても、グラハムは自由を相対化することができた。神の戒めを無視して自己を絶対化しようとすることに、罪の最たるあり方を見ていたからである。のみならず、物質文明を信じて疑わないアメリカに反省を迫ろうとして「共産主義を神は用いているのではないか」という踏み込んだ発言さえ、グラハムは当時している。そこで相川君は、諸著作の通時のおよび共時的比較を行って、直前の発言の背景にあるものを探ろうとし、彼の神学思想上の

深化を指摘するに至る。つまり人間を、罪人として単に否定的に捉えるのではなく、「自分自身を神に結び付ける能力を持つている」両義的な存在としても見るようになった、という意味での深化である。

第四章で記されるのは、福音伝道者という職務をグラハムが自覚したことの意味の再確認である。しかも、ここで再確認は、悲劇的な結末を迎えることになるニクソンとグラハムとが担った政教関係の伏線にもなる。

これまでの論述スタイルを継承し、本章でもニクソンとグラハムとの思想的布置を理解しやすくするためのキーパーソンが設定される。それがヴィンセント・ピールである。「積極的思考」という理念を掲げて日本のビジネス自己啓発書の世界でも一定の読者数を誇り、ドナルド・トランプも彼が指導する教会に通ったことで知られるのが(オランダ系)改革派教会の牧師ピールであるが、彼の神学思想には罪を「思考法と神の力とによって克服可能なものと捉え」る傾向があった。そしてこれは相川君の分析によると、信仰に「社会的効用」を期待して「現世的で政治的な成功を宗教と同一視する」ニクソンの考え方に近い。事実、絶対平和主義で有名なクエーカー信徒である母を持ちながらも、ハト派のそれとはいい難い経歴で政界の階段を登っ

てきたニクソンは、ピールとも親交を結んでいた。

しかし、そのようなニクソンとグラハムは歴代大統領の中で最も深いといえる交友関係を結ぶ。その蜜月ぶりは、最晩年のニーパーに、旧約聖書に出てくる御用預言者の物語を想起させるほどのものであった。これに対して相川君は、ピールを間に挟むことで鮮明さを増した、ニクソンとグラハムとの信仰観の相違を踏まえつつ、それでもグラハムがニクソンに協力できた理路を探る。そして、グラハムが一貫して自負を抱いていた「福音伝道者」という職務に注目するよう訴える。

前述したように、グラハムにとって福音伝道者の職務とは、大衆を悔い改めさせてイエスに従わせることにあった。このとき重要なのは、大衆の現状についての診断なのであって、ニクソン政権期、この福音伝道者の目の前にいるのは、自分自身とアメリカとに自信を喪失した「サイレント・マジョリティ」だったのである。そうした大衆に対しては、ピールのようにいわば闇雲に積極的思考を勧めるのではなく、むしろ、キリスト教的終末論を成り立たせている希望のモーメントに目を向けさせることをグラハムは心がけた。そしてそのことが、ヴェトナム後のアメリカの姿を模索し、それに責任を有する政治家ニクソンからも、高

い評価を得ることになったのである。

第五章では、ニクソンおよび政治との距離を模索する福音伝道者の歩みが描かれる。この章の叙述で補助線の役目をあてがわれるのは、オレゴン州から上院議員に選出された共和党の大物マーク・ハットフィールドである。

一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、友人ニクソンがヴェトナムからの撤退を図っている様子をグラハムは間近で観察していた。それは慎重になさなくてはならない。というのも、激化する反戦運動とは一線を画す人びとすなわち「サイレント・マジョリティ」こそがニクソンが自身の支持層と見なした集団であったし、その集団は、ヴェトナム政策に関しては政権を支持する傾向が強かった福音派のキリスト教徒を、数多く含んでいたからである。

しかるに、その敬虔さゆえにグラハムが深い信頼を寄せていたハットフィールドは、一九七三年二月、ホワイトハウスでの朝食祈禱会で、アメリカのヴェトナム政策に対して国民規模での悔い改めを説くスピーチを行った。これに驚いたグラハムは、国民を分断させてはならないとハットフィールドを諫める。だが、ハットフィールドは逆にグラハムの中に「市民宗教」の負の側面を認め、これを指摘する。オレゴン州選出の上院議員によれば、グラハムは神的

な正義を政治権力者に自覚させるといふ、預言者的な職務を放棄しているのである。

相川君はこのエピソードに関心を寄せる。グラハムもハットフィールドも所属教派は、保守的な信仰で知られるバプティストではある。しかし、あるべきキリスト教徒像をめぐつては、両者の間には溝があった。キリスト教徒の個人としての側面を前者が強調するのに対して、社会に属しそこでの義務を担っている存在としての側面を後者は重んじる。しかし、相川君によれば、ここで大事なものは、両者の相違それ自体ではない。むしろ、それでもグラハムがハットフィールドを信頼し続けたこと（朝食祈禱会での一件の後にも、副大統領候補についての意見をニクソンから求められたグラハムは、ハットフィールドを推薦している）の検討こそが、グラハムの、ひいてはアメリカの福音伝道者が有する政治的志向性の特徴を浮かび上がらせるのである。

民主党への鞍替えを勧められたこともあるハットフィールドが共和党員であり続けたのは、彼がハーバート・フヴァーの後継者をもって任じていたからであった。リンカーンを輩出して奴隷解放に寄与し、人間の尊厳や経済的機会の均等を重んじる政党。それがハットフィールドに

とつての共和党である。そのため、バリー・ゴールドウォーターに代表される党内保守派に対して彼は批判的で、そのことがグラハムの共感をかねてより誘っていた。しかし、本論文でより重視されるのは、この上院議員をグラハムが「キリスト教徒の偉大なリーダー」として評価した点であった。

ここから相川君は、自身に与えられた「カリスマ」が有効に働く領域を決して広くはしないと観念していた、福音伝道者その人の意識を浮かび上がらせる。ここからはまた、世界と宇宙の完成という終末論的ヴィジョンに接続する「神の下にある国家」再建に寄与しようとするも、ここでいう再建には多くのマンパワーが必要としたグラハムの自覚も読み取れる。そのマンパワーとは、伝道意識を多分に有して各界で働く人びとが担うそれであり、政治の世界において当時これを最も発揮しているとグラハムに期待されたのがマーク・ハットフィールドその人であった。

ハットフィールド評からはまた、グラハムの思い描いていた、あるべき国家アメリカの姿も見えてこよう。それは相川君の再構成によると、「福音伝道者とアマチュアの福音伝道者として十分に倫理的な素質を持つ預言者、そして、大統領という国家の首長」が一致協力し合う「神の下の

国」に他ならなかった。

結論では、本論文でなされた議論の整理とその意義がまず示される。

本論文は「罪」をめぐる神学思想と「福音伝道者」という職務観とを重視することで、特殊アメリカ的な宗教家の政治思想を浮かび上がらせようとするものだった。

その際、前者の神学思想は特に冷戦期にあつて、自由観の形成の仕方に、ひいてはアメリカ人の自由を脅かしていた共産主義の規定の仕方に、大きな影響を与えることになった。また後者の職務観は、宗教家と大統領と各界で活躍する敬虔なアマチュア伝道者との一致でもたらされる「神の下の国」というヴィジョンにつながるものであり、その限りにおいて、一部の人びとによって根強く説かれてきたグラハムその人の非政治性(と、非政治的な宗教家になぜホワイトハウスと深くかわったのか、といった問題設定)は、慎重に再考されるべき論点だとされる。

最後に相川君は、自覚的に考察の対象から外した一九七〇年代後半以後について触れる。グラハムが夢見た「神の下の国」アメリカは、友人でもある大統領が自ら引き起こしたスキャンダルによって崩壊する。ウォーターゲート事件によって「酔いがさめた」グラハムは、同じ南部出身で

福音派に属するジミー・カーターが登場したときも、その後テレビ伝道者ジェリー・ファルウェルが人工妊娠中絶禁止を訴える団体「モラル・マジORITY」を率いてレーガン政権期に注目されたときも、慎重に彼らと距離を取ることに終始するのであった。その後の福音伝道者は、過去の政治的言動に対して批判を受けることがあっても、人間としては多くのアメリカ人から尊敬を受けつつ長寿を全うし、百歳を目前にして世を去った。相川君は、新しい資料の発見や公開はこれからだとしながら、自身の考察の暫定性に触れて結びとしている。

三 評価

アメリカの特にプロテスタント・キリスト教のひとつの特徴は、福音伝道者という存在が認知されていることに求められる。キリスト教の聖職者というとき、一定の場所に定住して地域住民の魂のケアを持続的に行う神父や牧師の姿を、人は思い浮かべるが、これに対して福音伝道者は、特定の教会で毎週説教して司牧活動を行うわけでは必ずしもない。けれども、彼ら彼女らの口から発せられる、往々にして伝統的な信仰箇条に即したメッセージは、人びとの間で広く支持されてきた。アメリカ史を振り返っても、福

音伝道者の発言は巨大な動員力を発揮し、重要な社会的・政治的出来事を周期的に誘発している。彼ら彼女らの言動に対する社会科学者のそして政治思想的吟味が求められる所である。

日本に目を転じると、この特殊アメリカ的といつてよい宗教家のタイプとそれを支持する人びとを「福音派」と呼ぶ傾向が、二〇世紀の最後の四半世紀ごろから一般化し始めた。そこには、自ら福音派であることをカミングアウトして選挙を戦ったジミー・カーターや、カーターその人に失望して鞍替え先を求めていた福音派を票田にしたロナルド・レーガンがホワイトハウスに入ったことが大きく関係している。今世紀に入っても、大統領選挙や連邦議会選挙など大きな政治イベントが近づくたびに、福音派の動向は日本のマスメディアでも取り上げられる。しかし、この集団をめぐっては、それに属する人びとの特異な言動だけにジャーナリストイックな注目が集まりやすいのも確かである。彼ら彼女らがどこから来て、どういう存在であり、今後どうなるのか。それが検討されないまま、福音派は、アメリカの政治過程に対していわば不整脈を引き起こす存在として、あるいは恐れられ、あるいは軽視され、そしてあるいは君子が語るべきではない怪力乱神として処理され

てきた。

もちろん、日本の政治学界でも、アメリカの福音派に取り組んだ業績がないわけではない。たとえば、彼ら彼女らの投票行動や政策決定過程へのかかわり方などを実証的に論じた成果を私たちは得ている。だが、政治思想研究の分析対象としてこれを扱った研究の蓄積は、極めて少ないといわざるを得ない。そこには理由があるのも確かであって、福音派の人びとが重んじるメッセージは素朴なそれであり、通常の研究方法で解き明かしうる「思想性」が弱いのである。しかし、「思想性」を欠くと思われる言説であっても、それがポピュラリティを獲得する以上は、そこには然るべき社会的背景が存在する。何より、その言説が宗教的な言説であるのなら、それは当該宗教の教説の歴史の中で、必ずや一定の位置づけが可能なはずである。

前置きが長くなったが、相川君は本論文を通して、アメリカ福音派の政治思想の解明に挑んだ。その際、彼は、記述が図式的になるのを避けるべく、ピリー・グラハムという福音伝道者に焦点を当てる。キリスト教神学の観点からこのたびのジャッジにかかわった審査員のひとりの言葉を借りるなら「その人を語ることが二〇世紀のアメリカ・キリスト教史を語ることだ」と規定される人物であるだけに、

この「選択と集中」には妥当性が高い。しかも、グラハムは多くの歴代大統領と親密な関係を築いてきただけに、この宗教家の吟味は政治学的な意義も獲得しやすくなるはずである。

ところで、名著『アメリカの反知性主義』の冒頭でリチャード・ホーフスタッターが言及しているように、特に伝道集会の場で発せられるグラハムの主張は、従来その扇動性だけが指摘される傾向があつた。しかし相川君は、これを研究に値する素材とすべく、哲学やアメリカ政治史、あるいは宗教社会学やキリスト教史から得られた知見を総動員する。そしてそこから再構成された福音伝道者の姿を基礎にして、いわば「現代アメリカの政治神学」を描き出すのである。このとき、社会科学の学徒には縁遠い、神学書の咀嚼も相川君は十分に行っており、かくして、神学の方面からも政治学の方面からも一定の評価を得ることができ作品ができた。類似した研究がまだまだ少ないことに鑑みると、この視野の広い研究のオリジナリティは特筆に値する。

他に数点、本論文の評価ポイントを挙げるなら、まず、アメリカ政治に関与した宗教勢力の多様性を相川君が浮かび上がらせたことを指摘したい。その熱心な信仰ゆえに反

共主義に凝り固まり、タカ派的な外交政策を支持すると思われがちなのが、福音派である。しかし、ソヴィエト・ロシアをどう見るかという論点ひとつ取り上げても、福音派内部では見解の相違があり、しかもそうした見解のそれぞれに神学史から導き得る理論的背景があった。それゆえ、反共主義を共有したとしても、福音派の政治的選択は必ず特定の勢力に向かうわけではない。ここでの主張は、従来の福音派像に修正を迫るものである。しかもこの論点に対して相川君は、グラハムとカール・マッキンタイアという固有名を有した人物の比較を通じて取り組んでおり、議論はいきおい生氣を帯びることになった。

さて、「グラハムと政治」というテーマが取り上げられるとき、これまで必ずといってよいほど言及されてきたのが、グラハムのニクソン支持に対する老ニーバーの批判である。職業政治家に向き合うとき、宗教家は批判的な距離感を持ち合わせていなければならない。しかし、ナイーブな福音伝道者はそれがわかっていないというのが、ここでの批判の要点である。そしてこのニーバーの主張は、その後、ひろく福音派の政治的未熟さを論じるときの大前提になったといっても過言ではない。しかし相川君はホワイトハウスに入りするグラハムの姿に、大統領たちに対する

素朴な友情でも、いわんや政界への野心でもなく、直後で紹介するように、ほかでもない福音伝道者という職務を自覚しているがゆえの接近だったという解釈を下す。政治の世界に接近するかと思えば、距離を取ろうともする。また、「敬虔なクリスチャン」政治家を副大統領候補に推薦すれば、宗教を語ろうとしない国家元首との交際を持続せざるもする。特殊アメリカ的な宗教家の一見矛盾しているとも思える政治的言動に対しても、一貫した説明が可能であることを相川君は示してみせたのである。

そして何より、相川君の果敢な挑戦は、アメリカの政教関係を読み解くための概念装置として「福音伝道者」を提唱した点に極まる。たとえば今日もなお参照されることが多いマックス・ウェーバーの宗教社会学上の成果にしても、その中でも特に有名な「祭司」や「預言者」概念だけでは、相川君によると、アメリカの分析には十分ではない。「預言者」について述べるならば、ウェーバーの議論ではこの理念型が体制批判と結びつけられがちになる。しかしアメリカでは、「神の国」であるはずの国家の墮落を嘆き、個人の資格で現政権を熱狂的に支持するよう人びとに訴える「預言者」も多いのである。これに対して、悔い改めとイエスへの信従を一定の規模で生じさせるべく、いま大衆が

置かれている状況を的確に察知する福音伝道者の存在は、アメリカにおいてポピュリズムの有効な誘因となり得てきた。また、アマチュアリズムを重んじて伝道のチャンネルの多様性を積極的に肯定する福音伝道者は、各界の指導者を動員し彼ら彼女らに協力を促すことで、宗教的に(再)統合された国家が実現することへの期待を人びとの間で持続させることに貢献できる(事実、今世紀になっても、「神の下の国」アメリカという理念に照らし合わせて、福音派に属する一部の人は政権を熱狂的に支持するし、別の人はそれに批判の矛先を向けている)。ことほど左様に、現代アメリカの政教関係を読み解くのに必須となるのが、相川君いうところの「福音伝道者」なのである。

しかし、挑戦というものが得てしてそうであるように、新たな視角の提示は、それが野心的であればあるだけ、厳しい精査にさらされなくてはならないこともまた確かである。本論文の課題と思われるものに対する指摘も、こうした事情から始まる。

まず、本論文では、「福音伝道者に固有の性質」に注視すべきことが説かれるが、その内容をより一層洗練させることが望まれる。たとえば相川君は、ウェーバーのいう「祭司」や「預言者」に匹敵する意義を、アメリカの政教

関係を読み解く上では「福音伝道者」が有しているとする。しかし、「祭司」や「預言者」と比較したとき、「福音伝道者」は個別具体的な事例にあまりにも即し過ぎている。そのため、かの二つの理念型が理念型であるがゆえに可能となった、他の歴史的事例への適用が、方法意識を伴った仕方で「福音伝道者」にも期待できるのか、疑問なしとしないのである。そもそも、いかなる歴史的事例も特定の理念型には収まり切らないという自覚を「福音伝道者」は担保できるのだろうか。新しいことばを紡ぎ出す人は、概念と事実との緊張関係をどれだけ自覚しても自覚しすぎることはない。

次に指摘したいのは、相川君がグラハムの伝記的事実を丹念に追うことで、政治の問題に向き合った福音伝道者の(神学)思想を動態的に描こうとした点にかかわる。この記述姿勢の結果、「深化」や「成熟」といった用語が本論文では、グラハムを語るときのキーワードとなった。けれども、これらの言葉が帯びる価値付与的なニュアンスに鑑みるとき、どのような意味での「深化」であり「成熟」なのかを、もっと掘り下げて論じる必要があるはずである。たとえば、自身を神に結びつける能力と罪性とを両方とも重んじる「人間の両義性」を自覚した点に、相川君は福音

伝道者の神学思想の「深化」を見た。しかし、それは本当

に「深化」なのだろうか。罪を強調してデビュリーした伝道者が社会にもまれて神学的破綻をきたした、という解釈も可能ではないのか。また、グラハムの議論に少なくとも変化が確認できるとしても、それは神学思想レベルの変化だと断定できるのか。目の前にいるアメリカ人の、本人も自覚していないかもしれない霊的なニーズを的確に察知した上で福音を効果的に意識させることを、福音伝道者は課せられている。つまり、彼もしくは彼女には、価値中立的な意味で「オポチュニスト」たることが求められている。それゆえ、「思想内在的ではない要因がここでの変化を引き起こしたのではないか」という問いを払拭するだけの説明が、ここでは十分になされなくてはならない。

また、本論文では、グラハムの言動にはつきりした輪郭線を与える相手役が、いわば狂言回しの各章に配置されており、そのことが確かに分析上の効果を發揮している。ニーバーやマッキンタイア、ピールやハットフィールドといった相手役の選択も、適切ではある。しかし、相手役の設定が立論にどう貢献するのが章によって微妙に異なっていることも否めない。なぜグラハムを論ずるのにこのようなスタイルをとることが望ましかったのか、方法論的な

説明がもっとあつて然るべきである。

そして、本論文が政治思想研究であることを思うとき、次のような論点が審査員の間で議論になった。まず、第三章で扱った冷戦期の自由観は、当時から既に論争的であったはずだが、これについては一部の特定資料にやや依拠しすぎた叙述が見られる。加えて、禁欲を自身に課したのかもしれないが、アメリカ保守主義を成り立たせている他の要因（オールド・ライトや経済保守など）とグラハムの神学思想とがどのように結びつき、どのように反目し合うのかについて、相川君しかなし得ない説明ができたはずである。それを示して欲しかった。

以上、本論文に対して肯定的評価を受けるべき点と課題となる点を指摘してきた。ただし、課題となる点にしても、それらは、全体としての本論文の価値を損なうものではなく、相川君が研究者として更なる成長を示してくれることを期待して挙げたものである。

したがって審査員一同は、本論文が現代アメリカの政教関係を解明する学術的価値の高い業績であると判断し、ここで示された相川裕亮君の学識が、博士学位（法学、慶應義塾大学）を授与するに値する旨を報告する次第である。

二〇二〇年七月四日

主査	慶應義塾大学大学院法学研究科委員 法学部教授・博士(法学)	田上 雅徳
副査	慶應義塾大学大学院法学研究科委員 法学部教授・博士(法学)	岡山 裕
副査	国際基督教大学 教養学部教授 (P.h.D.)	森本あんり